



ちょっとそこまで～お散歩日和（地域編）～



真宗会館別館



ご存知葛飾北斎の「富岳三十六景」から「東都浅草本願寺」の図です。ここでは、見事な構図の妙を見せてくれています。手前右手には本堂の屋根を大きくクローズアップし、遠景下に浅草の街並み、さらにその奥に富士を据えるとともに、空に高く揚がる鳶（とび）凧と、よく分からないけれど存在感のある櫓（やぐら）が組まれています。

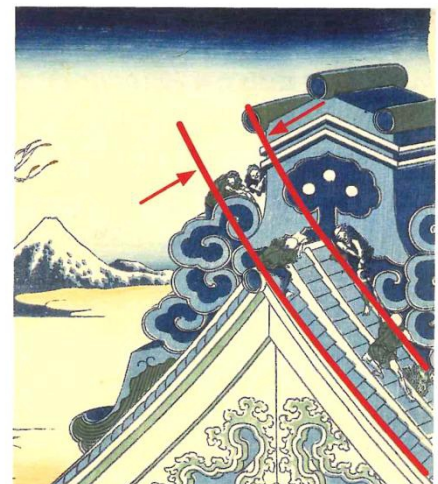
よく見ると、本堂の屋根で、瓦職人たちが吹き替えでしょうか、何やら忙しく作業をしています。目を凝らしてみると、人数は5人もいます。はたして、こんな危ない工事が可能なのでしょうか。そのトリックについて、実際の浅草本願寺の屋根と比較した解説が「富岳三十六景を読む」（有泉豊明著）にありました。引用します。

東本願寺の本堂の屋根の鬼瓦は、「経（きょう）の巻鬼瓦」と呼ばれる鬼瓦です。なお、鬼瓦とは「棟の端に取り付ける飾り瓦」のことですから、この「経の巻鬼瓦」の前方部分には、本来「掛け瓦」と呼ばれる化粧瓦が横一列に並べられているだけです。

しかし北斎の描くこの「東都浅草本願寺」の本堂の経の巻鬼



現代の東本願寺・本堂の掛け瓦



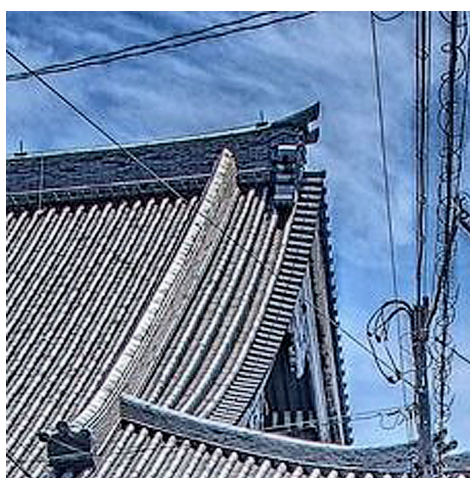
北斎の描く東本願寺・本堂の掛け瓦の部分

瓦の前方に位置する「掛け瓦」の部分には、北斎苦心の見事な大きな間違い（でたらめ）が描かれております。現在の東本願寺本堂の「経の巻鬼瓦」の前方の「掛け瓦」の部分と、北斎の描く「掛け瓦」の部分とを比較してください。（前ページの比較図を参照）

「掛け瓦」は鬼瓦の前方の狭い空間に横一列に並べられた飾り瓦です。（左の、赤で表示部分）しかし、北斎の描く東本願寺本堂の経の巻鬼瓦の前方の「掛け瓦」の部分は異様に広く、奇妙な瓦様構造物が3列も並べられ、この部分に3名もの職人が悠々と作業を行っております。（右の、赤で表示部分）

北斎は本来、「経の巻鬼瓦」の前方に位置する構一列の狭い空間に過ぎない「掛け瓦」の部分を、極端に広大な部分として描いております。なんと奇抜で雄大な発想でしょうか。

引用は以上です。浅草の東本願寺の鬼瓦部分をいろいろと探したのですが、適当な写真を手に入れませんでした。が、次の写真を見れば、北斎の図より、明らかに幅が狭く、とても人が何人も立って作業できるような広さではないことは明白です。



北斎は、このように物事を写実的にとらえるだけではなく、背景や構図など、空間に独特の表現を含ませ、見るものに斬新な世界観を示すことに卓越した画家であるということを改めて認識させてくれます。

ついでに触れますと、最近読んだ本に、梶よう子著「広重ぶるう」があります。ここでは、歌川広重が、鳴かず飛ばずの貧乏暮らしの中で出会った、北斎

の使う舶来の高価な顔料「ペロ藍」の、深く澄み切った色味に開眼、一念発起する姿が描かれています。遠くゴッホをも魅了した絵師の、比類なき半生に大きな影響力を与えたのが、北斎の「藍摺絵（あいずりえ）」だったというわけです。そう思ってこの作品を見直してみるとなんと藍色を多用していることか。「ペロ藍」とは、今で言う「プルシアン・ブルー」のことで、当時はベルリンから伝わってきたことから「ベルリン藍」、それがなまって「ペロ藍」と呼ばれていたそうです。

長々と、北斎の作品紹介に終始してしまいましたが、本題はこれからです。

この絵の発想の原点は、おそらく浅草本願寺本堂の屋根と富士山の形が相似形を成していることに気付いたことに由来していると思います。当時の人にとっては、その両者を並べて見てみたいと誰もが望んだ筈です。誰もが望むのであれば、それを浮世絵に描けば売れる、そう目論む版元がいたのは当然の成り行きです。

そのアイディアに対して、実際にはこういう角度、視点で見ることは不可能ですから、想像力を逞しくして、「なら描いて見せようではないか。」と闘争心に火が点き、北斎が奮い立ったのではないかと思います。

実際、この作品と全く同じ構図の作品が、「江都駿河町三井見世略圖」です。この絵のユニークな点は、越後屋の賑わいを一切描いていないことです。先の広重の「名所江戸百景：駿河町」で



は人々の喧騒が伝わってくるほどですから、その違いはどこから来るのか興味をそそられます。

さて、その富士山と相似形をしている屋根が並んで見える場所が、私たちの住まいのすぐ近くにもあると聞いたら、皆さんはどう思いますか。

場所は、谷原ガスタンク（正式にはガスホルダーと言います。）の北隣、自動車教習所のコヤマドライビングスクールの東隣にある真宗会館別館です。

ここは、真宗大谷派東本願寺派の施設で、教法の聞信・宣布の拠点として設立されたもので、清戸道を挟んだ向かい側にある別館の屋根が、富士山の裾野の傾斜を模しているのです。



いつも不思議に思うのですが、宗教はどうしてこうも細かく分裂していくのでしょうか。そもそも親鸞が望んでもいない教団を作り、本願寺を建立し、さらに東と西に分かれていること自体とても不思議なことなのに、同じ東本願寺派でも、浅草本願寺は現在また別なグループ、浄土真宗東本願寺派の本山となっています。個人的に宗教に胡散臭さを感じるのはこういうことも一因です。教義の解釈が一人一人違うことに加えて、これに何らかの利益が重なるからなのではないかと穿った見方をしてしまいます。脱線が過ぎました、宗教批判をするつもりは全くありません。

話を戻します。

もしも現代に北斎が蘇り、この谷原の構図を見て、再び描くとすれば、ガスホルダーを加えた図になるはずです。それが下の写真です。左端に無線塔もあって、「浅草本願寺」の図と益々似ていることにお気づきでしょうか。この写真でははっきりしませんが、送電線の豊島園線のケーブルが横切っています。これを鳶風の糸と見立ててみれば、マニア垂涎の構図と言えなくもないような気がしてきます。



この写真は練馬区立高松小学校の4階廊下から西を臨んで撮影しました。冬の夕暮れ時は西の空が深紅色付き、見事に美しい光景です。きっと高層階の方は毎日それを楽しんでいらっしゃるでしょう。（終）